

哲学から見たルネサンス

今道友信

1. ルネサンス (renaissance ←- rinascimento 再生、復活)
一般にこの語を文芸復興と訳し、主として Leonardo da Vinci (1452-1519), Michelangelo Buonarroti (1475-1564), Raffaello Santi (1483-1520) の三人の大芸術家を想起し、その作品がギリシア・古典古代のように自由闊達であるためルネサンスという語で主として十五・十六世紀のイタリアの文芸復興を表象する。
2. その一般的見解が全く誤まっているとは言えない。それは後期ルネサンスの代表的人物であって美術の大家だからである。しかしその人びとの200年乃至300年くらい以前から、古典文化の活気ある復興が「十二世紀ルネサンス」として Etienne Gilson や Charles H. Haskins たちによって、すでに1920年代から言われていた*。十二世紀ルネサンスは上述の周知の十四・五世紀のイタリアルネサンスよりも知的な性格においてはより重要であると考えられる。中世の研究者に限らず、思想史一般の研究者は通常ルネサンス(古代文化復活)を三つ数える。ひとつは八世紀から九世紀にかけてのカロリングルネサンスで、カール大帝が782年にヨークの修院長アルクヌスを招聘し、スコラ(学校)を建てて教化につとめ、ついでその後の二つのルネサンスに較べることはできないほど「局地的で水準も低い。十二世紀ルネサンスはルネサンスの頂上ではないかと考えられる。
3. 中世が「暗黒時代」と言われるのが常識であるが、それにどう答えるか。このような問いが今に発せられるのは十字軍のような愚挙や魔女裁判のような野蛮な事件のみに注目するからなのであり、ブルジョア火刑のごときは十六世紀末の近世の出来事であり、必ずしも中世だけのことではない。
中世には人類史の研究所としての Studium generale すなわち Universitas (研究者の組合) が創設され、1931年に Empire State Building がニューヨークマンハッタン区に建てられるまで世界最高の建築物は中世に建てられた教会の塔であり、そこにはスラットガラスがはめこまれる窓、堂を反する音を流すパイプオルガン、顔面に表出される内的思想も造形化した聖人像、壁画、天井画、そして十二世紀から写本が増加し、armarium (書棚) から書庫そして図書館に移行し、Scriptorium (写本室) は独立した施設であった。十二世紀には上質のギリシア言語写本が多数作成された。
4. 三つの源泉
十二世紀ルネサンスの再生源泉
1. トレドワ (スペイン)、 2. シチリア (南イタリア)、 3. ヴィネツィア ピサ (北イタリア)
アラビア文献、 878年以降イスラーム文化人の交流
(アラビア語訳教学校) (ギリシア語、ラテン語、アラビア語が公用語) (ギリシア語のラテン語)
三箇所を哲学のみでなく科学を訳され訳す。

* Ch. Haskins: The Renaissance of the Twelfth Century Cambridge, M. 1927
E. Gilson: La philosophie au moyen age Paris 1925

系統 哲学から見たルネサンス

5. 文献による研究

i) 十二世紀ルネサンス

Abaelardus: Sic et non (判断弁証法的方法的発明)
 教父たちの学説から論議と呼ぶ命題を158選び、それに対する命題を集成し新しい解決問題。問題提出、肯定論証、否定論証、徹底的の解決、前掲諸論証の批判ない反論を積み重ね、主にアリストテレスのトピカ第八巻の弁証論を使う。トマスの神学大全の体系を先駆けている。

Quod genus literarum non cum credendi necessitate, sed cum indicandi libertate legendum est. (わかる文献を読む際、信じてはならないという必然性はなく自由に判断可能)

Aristoteles はイスラームの哲学者たちが研究していた。それを十二世紀は知られ、さらに加えて「アリストテレス」は知られていなかった Platon を学ぶ始める Augustinus と Boethius のみから、Platon と Aristoteles へ。

ii) 十四世紀イタリアルネサンス

Dante (1266-1321) 天国の靈魂の義務 (神との一致)のみを超え、
 Quoi vous tuez le mal vous tuez le bien.

O militia del ciel cui io contemplo, ああ天上なるわが見る勇士!
 adora per color che sono in terra 悪例によって道をばすれた
 tutti sviati dietro al malo esemplo! 地上の人間の為の涙のりませ。(Par. XVIII. 124-126)

そして嵐を待つ (革命を待て)
 le poppe volgerà u' son le prore 船首は船尾の方に向く (Par. XXII 145-148)

Petrarca (1304-1374)
 Ventoux 山登山の記 セホルクロ神父あて書簡
 長年の間(冬)の頃(冬)そこにゆく夢を抱いていました。

Audisti quemam ascendentis in pectus ascenderunt eare.
 登りたあつていかなる性みかわるの胸に登ってきながら耳を打つてはるさる。

iii) 十五世紀イタリアルネサンス

Ficino (1433-1499) 人間の尊厳と悲劇
 孤独な生活の有益なること 神は不変なる一にして唯一の静である。

Pico della Mirandola (1463-1494) 人間の尊厳について

iv) Varia

- G. Groote (1340-1380)
- Nicolaus Cusanus (1401-1464)
- Pietro Pomponazzi (1462-1525)
- Rabelais (1494-1553)
- Paracelsus (1493-1541)

6. 系譜